

令和4年11月6日

「濱口梧陵文庫」の世界

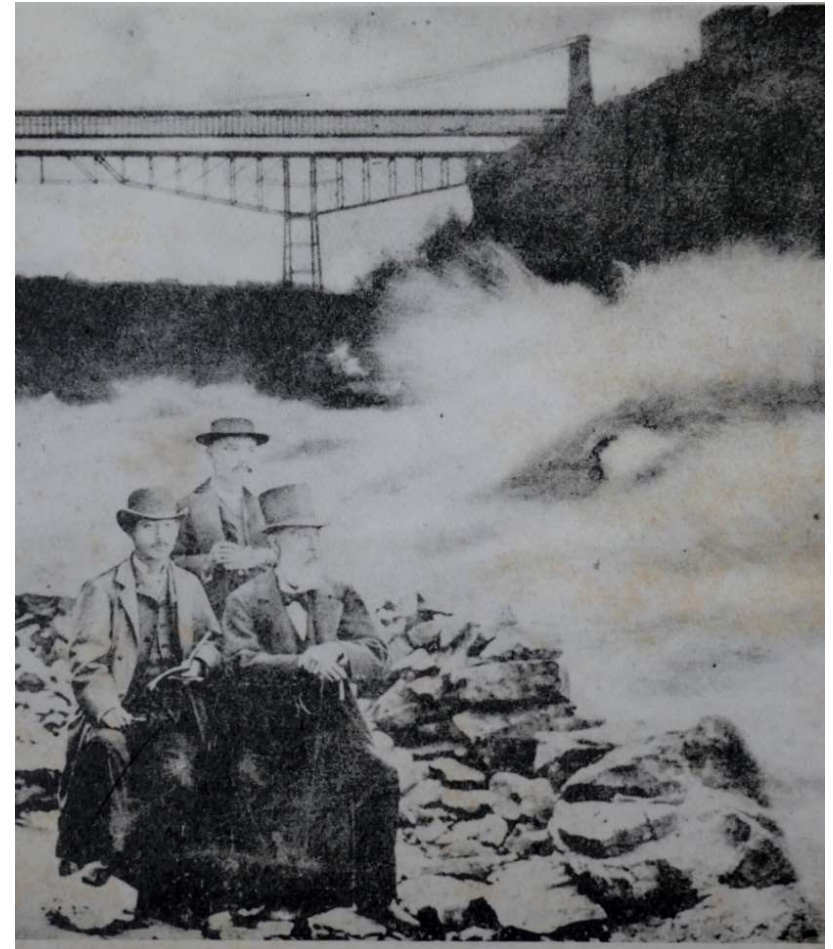
和歌山県立図書館

主査 松本泰明

濱口梧陵とは

濱口梧陵（1820年生～1885年没）は、諱は成則、通称は儀兵衛。ヤマサ醤油7代目当主にあたります。紀州有田郡広村の出身で、佐久間象山に入門し、勝海舟や福沢諭吉等とは親しい友人でした。安政の南海地震の際の救助活動並びに自費での大堤防の建設により広村を廃村の危機から救ったことが特に有名で、また、和歌山藩政改革に参画し、初代和歌山県会議長に選出される等、明治期の和歌山を代表する政治家の一人でもあります。

昭和十二年には安政南海地震の際の逸話を元に創作された物語「稲むらの火」が国語の国定教科書に採用され全国的にも知られています。最近では小学五年生用国語教科書に「百年後のふるさとを守る」が掲載されるなど再び注目をあびています。



ナイアガラの滝を眺める晩年の濱口梧陵
（『濱口梧陵伝』より）【展示 146・148】

注目度が増す一方、『濱口梧陵伝』で書かれていること以上に梧陵が実際に考えていたことをより深く知ろうとするとこれは、そう簡単ではありません。

なぜなら、梧陵自身は番頭さんに要件を伝える時にも「十のものは二つか三つか言うて、あとは悟れ悟れ察しろ察しろ」というタイプの人であつたらしく、自分の考えや情熱を直接文章や言葉で発する人では無く、どちらかというとそのを自身の行動や発言の中に忍ばせる人で、彼自身が書いた文章もけして多くは残されていません。

実際、残された講演の記録などを読むと本人的にはとてもわかりやすく伝えているつもりなのでしょうが、しっかり「悟れ悟れ察しろ察しろ」の世界になっています。

そういうお方の考えに迫ろうとするどうしてもより源流に近い情報を見つけて彼の思考の形態が形成されてきた過程を追走する必要があります。今回お話しする「濱口梧陵文庫」の調査を行った理由もそれがわかる情報を見つけ、分析するということを重要な目的にしています。

「濱口梧陵文庫」とは

平成二十四年に濱口梧陵のご子孫から和歌山県立図書館に寄贈された梧陵自身の蔵書とされる書籍群の総称で、その規模はタイトル数約550点、(実際の)分冊数では5,705冊、巻数(各著書の著者が制作時に設定した数。伝統的な数え方)としては15,000巻近くにのぼる資料で構成されています。

「濱口梧陵文庫」は、郷土史家の濱口恵^え璋^{しょう}氏や広川町による調査で、書誌情報は詳細に把握されていました。県立図書館では、令和元年から四年にかけて蔵書印や書込み等各書籍に残された情報への調査を実施しました。今回はその調査結果をお話します。



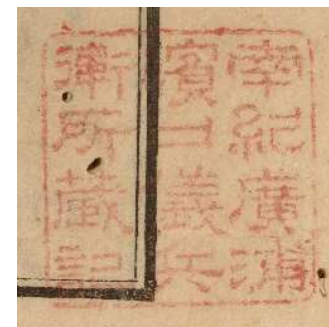
西濱口家の土蔵に収蔵されていた頃
(昭和期)の梧陵文庫

調査で判明した点

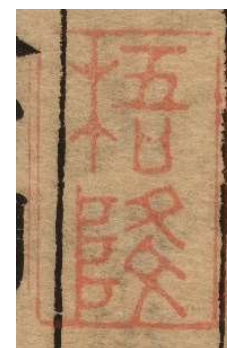
- ① 550点近い蔵書の内、465点に「梧陵」「南紀廣浦濱口儀兵衛所蔵記」等の名前に由来する蔵書印や「黄箴園図書記」などの蔵書印が押印されています。その8割5分の書籍に梧陵の蔵書印が押印されているためその蔵書の大部分は少なくとも梧陵の所有したものと推定できる結果でした。黄箴園図書記印は今回の展示図録の裏表紙にも使用されています。
- ② 梧陵が特に造詣が深かった分野である地理・歴史関連の輸入漢籍や徂徠学関係の書籍、海防・兵書関連の書籍等は、同時期の大規模な大名蔵書と比較しても特出すべき内容のコレクションが形成されていることが明らかになり、中でも地理歴史関係の書籍には、梧陵の記名のある書込みが多数見つかりました。



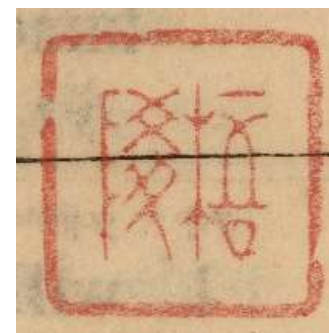
濱成則字公奥



南紀広浦濱口儀兵衛印



梧陵印(縦)



梧陵印(横)



黄箴園図書記印



ヤマサ濱儀封印

第1章 「濱口梧陵文庫」と地域社会

梧陵の故郷有田地域は江戸時代を通して当地の商人が全国に進出し、巨万の富を築いた大豪商が多数誕生した地域でした。江戸中期以後になると地域として文化水準も高まり、特に菊池海莊等、湯浅地方の豪農商の子弟等によって漢詩結社「古碧吟社」^{こへきぎんしゃ}が発足させるとそれが顕著になります。

「古碧吟社」は文政九年(1826)ごろ和歌山より野呂介石の甥、野呂松蘆^{のろしょうろ}を師に迎え結成され、梧陵の師とも称される橋本柑園もその同人でした。

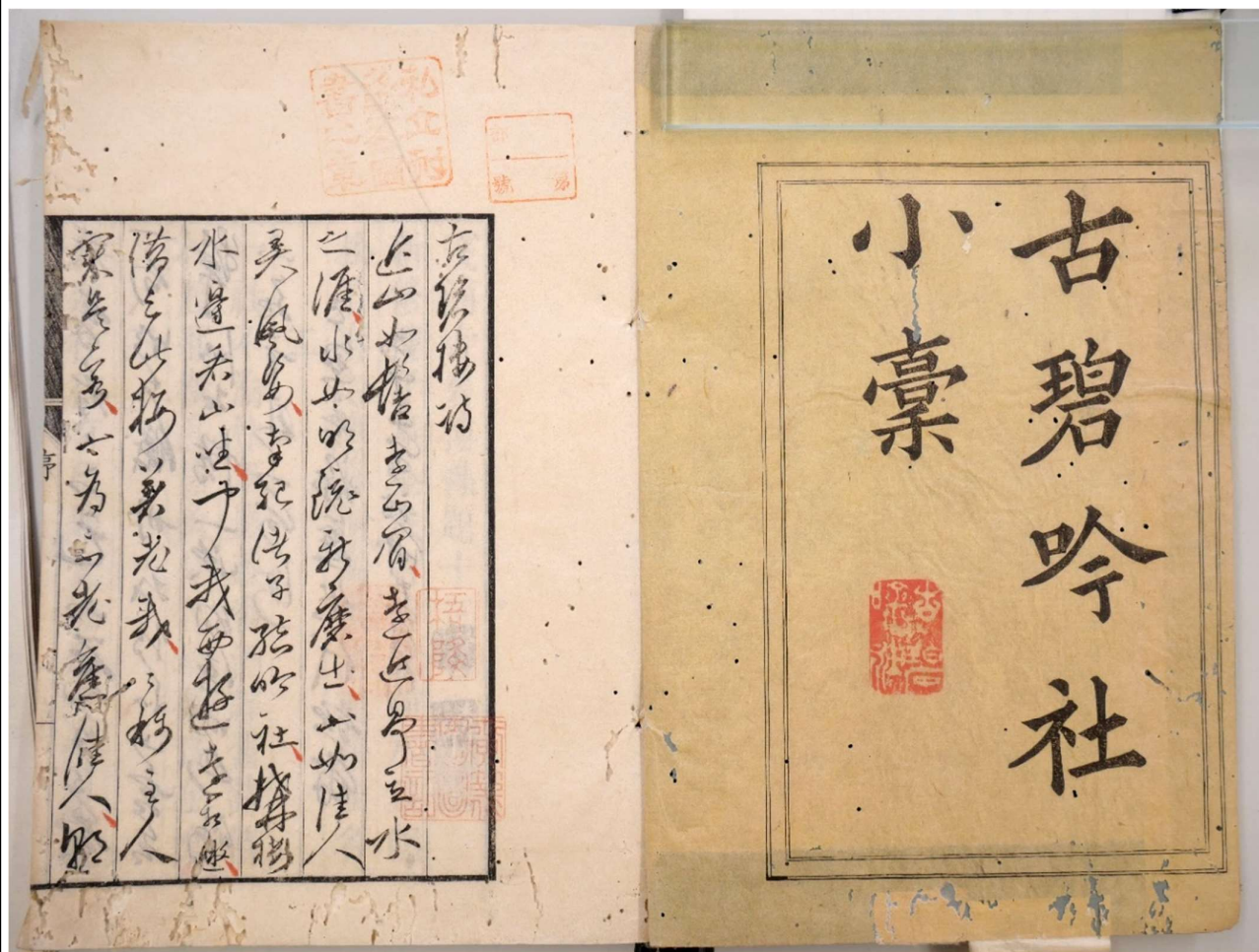
「古碧吟社」は文政十二年(1829)に『古碧吟社小稿』という同人達の詩集を刊行します。同書の伝存は稀で「濱口梧陵文庫」以外では関西大学図書館が所蔵していることが確認できる程度で貴重な書籍です。(追記 その後、湯浅町教育委員会に所蔵されていることがわかりました。)

こへきぎんしゃしょうこう

古碧吟社小稿 1冊

文政一二年(1829)刊

古碧吟社が設立し3年後には同地域で同人冊子が作成できるまで漢詩が普及していたことを示す重要な地域資料です。梧陵の蔵書印「梧陵」^{おうべつえんとしよき}「黄箴園図書記」が押印されている他、私立耐久中学校の蔵書印が押印され、学校内で地域史資料としても利用されていたことがうかがえます。 【展示 150】



「古碧吟社」の同人の中で特に梧陵と関係が深い人物に菊池海莊と橋本柑園が挙げられます。

きくちかいそう
菊池海莊(1799～1881、本名は垣内保定)

広村の近隣の栖原の出身で江戸の砂糖商で筆頭の地位を占めてきた河内屋孫左衛門店を経営する豪商です。また、全国に名の知られた卓越した漢詩人で、その交流関係は頼山陽等の一級の知識人に広くひろがっていたとされる文化人でもありました。菊池海莊の出現は同地域における漢学の水準が全国レベルの漢詩人を生むところまで進歩したことを示しています。

また、梧陵にとっては先導者と言える人物で、梧陵の佐久間象山への弟子入りは菊池海莊の紹介です。

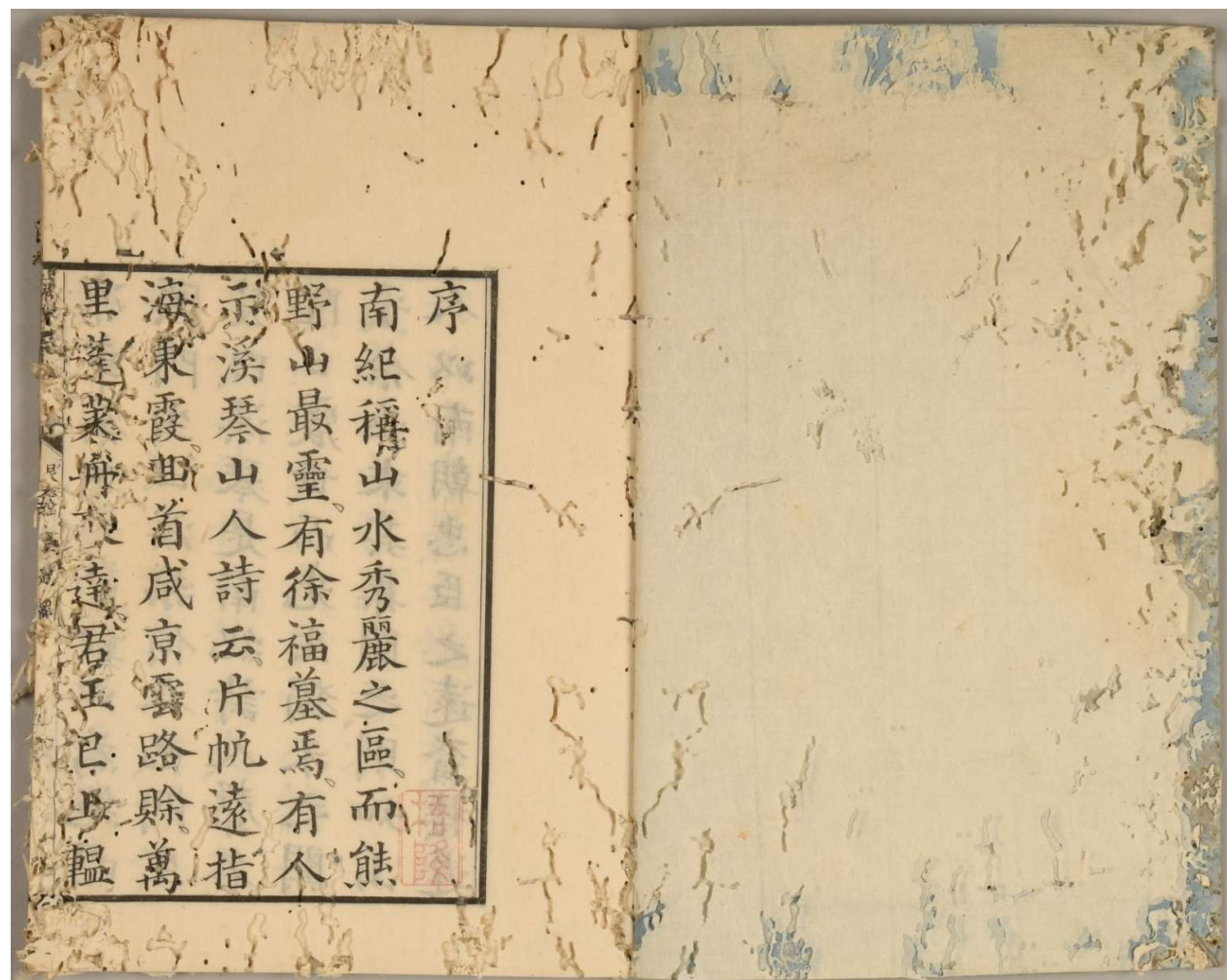
「濱口梧陵文庫」所蔵の菊池海莊関係の書籍の内、特に重要なものに海莊の漢詩文集『海莊集』かいそうしゅうがあり、当時の有田地方の漢学の水準をうかがい知るうえで重要な著作です。

かいそうしゅう
海莊集

二冊

嘉永元年(1848)刊
栖原村(現湯浅村栖原)の出
身で、漢詩人として全国的
に有名であった菊池海莊が
天保八年(1837)～弘化
四年(1847)に製作した
漢詩を掲載した詩集で海莊
にとっては3作目の詩集で
す。

【展示 152】



はしもとかんえん
橋本柑園

橋本柑園は『濱口梧陵伝』によると「同地方に於ける漢学の泰斗にして、広村文学の開祖とまで称せられ」る人物で、「濱口梧陵文庫」との関係では「彼が数千巻の蔵書を梧陵に売却したり。」とされます。

売却された書籍については『広川町誌』に「かつて長崎で ^{あがな}贖ったという明版二十一史は梧陵文庫に収まっている」という記載があります。

二十一史は史記から元史に至る中国の公式歴史書のことで2,559巻(冊数530冊)にのぼる書籍群です。二十一史の収納箱の蓋の裏側には「天保八丁酉(1837)年に長崎より持越」したことが記されています。『広川町誌』の記述が正しければ、橋本柑園の購入はその年と推定されます。

「二十一史」収納箱(全部で6箱)



【展示 151】

また、二十一史を購入したのが橋本柑園だとすれば、それだけでも地方知識人の蔵書形成史の観点から注目できる規模となります。なぜなら、当時刊本の輸入漢籍「唐本」は国内流通過程で輸入原価の数倍から数十倍に高騰したとされ、容易に手に入るものでは無かったからです。実際、現存する民間知識人の蔵書で全国的に大規模な物として知られる下記の文庫と比較しても橋本柑園の蔵書は大きく見劣りしない規模です。

1, 0 0 1 冊 安井文庫(安井息軒蔵書部分)

7 5 3 冊 蒼龍館文庫(金沢佐渡家旧蔵文庫) 出版地不明書 5 9 冊を除く

約 4 0 0 部 羽田八幡宮文庫 3, 0 0 9 巻

5 3 0 冊(2, 5 5 9 巻) 橋本柑園の購入推定される二十一史

橋本柑園は天保の改革の影響で破産したとされますが、その蔵書は濱口梧陵に売却され、梧陵に引き継がれたとされています。

第2章 「濱口梧陵文庫」の構成

総冊数5,705冊、巻数15,000巻近い「濱口梧陵文庫」の内、7割の約3,800冊を中国からの輸入漢籍「唐本」が占め、残りの3割の約1,900冊を和本が占めます。

まず、当時の知識人の蔵書として「濱口梧陵文庫」の規模はどの程度であったのか、その点、江戸後期の国学者足代弘訓^{あじろひろのり}の文集『伊勢の家苞^{いえずと}』の当時の蔵書家の順位をつけた記述が参考になります。

江戸にて第一書物の多きは聖堂なり。次浅草前守次郎兵衛也。和漢の蔵書十万巻あり。号を十万巻楼といふ。次阿州侯なり。和漢の御蔵書六七万巻ありといふ。次塙氏なり。蔵書皇朝の書物六万巻計あり。尽く好書にて無益の雑書なし。次朽木兵庫御蔵本三万余巻あり。次古賀侗庵先生蔵本一万余巻あり。号を万巻楼といふ。

梧陵の蔵書は巻数(実際の分冊とは違い書籍が固有に持つ巻数)で言うと15,000巻近いため、6番目蔵書家の古賀侗庵の蔵書を上回る大規模なものであった事がわかります。

また梧陵の蔵書の大部分を中国からの輸入漢籍「唐本」が占めるのも大きな特長です。冊数で約3,800冊、巻数で12,500巻あまりに及ぶ「唐本」の規模は、先に提示した橋本柑園の蔵書とされる部分と比較しても冊数で7倍以上です。

幕末明治初期を代表する漢学者安井息軒^{やすいそくけん}(1799～1876)の蔵書と比較しても約4倍の規模で、「唐本」がとても高価であった当時の地方知識人の蔵書としてはもはや規格外で、むしろ、より大規模な大名やその藩校などの蔵書が比較対象にできる規模になっていきます。

試みに蔵書目録から江戸から明治初期の代表的な大大名(30万石以上)や教育機関の唐本の蔵書冊数(ただし、梧陵の没年以降に発行された書籍及び写本は除く)を拾ってみると以下の結果になりました。

約 4 9, 0 0 0 冊 尊經閣文庫(加賀前田家蔵書)

約 1 8, 1 0 0 冊 蓬左文庫(尾張徳川家蔵書)

5, 7 4 9 冊 泊園文庫(西日本最大規模の漢学塾) 出版地不明書 3 2 6 冊を除く

5, 7 1 7 冊 写字台文庫(西本願寺歴代宗主の蔵書) 出版地不明書 2 8 3 冊を除く

5, 5 1 0 冊 伊達文庫(仙台伊達家の蔵書) 出版地不明書 1 2 7 冊を除く

5, 1 5 8 冊 紀州藩文庫(学習館等の紀州藩校の蔵書) 出版地不明書 4 4 8 冊を除く

約 3, 8 0 0 冊 濱口梧陵文庫

2, 5 4 3 冊 玉里文庫(島津久光及び玉里島津家の旧蔵書)

1, 8 6 3 冊 南葵文庫(紀州徳川家蔵書) 出版地不明書 4, 0 7 2 冊を除く

1, 6 7 8 冊 鍋島家文庫(肥前鍋島家蔵書) 出版地不明書 2, 2 1 7 冊を除く

ちなみに、最後の鍋島家でも約 3 6 万石で石高で 1 0 位の大名です。全国には約 2 6 0 の大名があったとされるので、上位 4 %に入る大大名です。それ以上の大名家はすべて石高 5 位以内に入る大名です。

濱口梧陵文庫はそれらの蔵書の中で真ん中から少し下に位置します。

加賀前田家と尾張徳川家がとびぬけて巨大な蔵書を形成しているのを除けば、大大名クラスの蔵書や藩校の蔵書は1,500冊から6,000冊の規模で、「濱口梧陵文庫」は引けを取らない規模と言えます。

大名等の蔵書は長期間を経て形成されたものが多いですが、梧陵とほぼ同時代の蔵書では島津久光の旧蔵書「玉里文庫」があります。島津久光(1817～1887)は明治政府の左大臣にもなった政治家として知られていますが、自ら歴史書『通俗国史』86巻を記すほど学問好きな諸侯でした。収集した「唐本」の冊数も多く2,543冊に及びます。しかし、梧陵文庫にはそれを上回る3,800冊の「唐本」が現存しています。

なぜ一個人である梧陵が巨大な蔵書を形成し、またできたのでしょうか。まず「濱口梧陵文庫」の漢籍の内容を中心に紹介しつつ、その疑問も考察していきたいと思います。

第3章 「唐本」の世界

第1節 清の文化(盛世)へのあこがれ 「濱口梧陵文庫」の武英殿本

「濱口梧陵文庫」の特徴に北京の紫禁城の印刷所で刊行された武英殿本とよばれる清王朝刊行物が多数現存することが挙げられます。武英殿本は台湾故宮博物院HPの「清代殿本図書特別展」の解説に

皇帝の政治理念と文化傾向を呈現する図書が、一部一部刊行され、歴代の宮廷版刻書とはかなり違った図書体系を形成し(中略)版刻の技巧の厳しさ、材料選択の重視、壮丁内容の華麗さなどは、「殿本」図書の形式上の重要な特色であり、みな皇帝の極致的精緻^{せいげん}と豪華さを体現したものです。

述べられているように、皇帝の政治理念(分野ごとに歴代最高を目指す)を体現する高品質のものでした。

「濱口梧陵文庫」にある武英殿版は『万寿盛典』『西清古鑑』『南巡盛典』『文献通考』の4点です。特に『文献通考』以外の3点は武英殿本の中でも現存が少なく、学術的・美術的価値も高い書籍です。

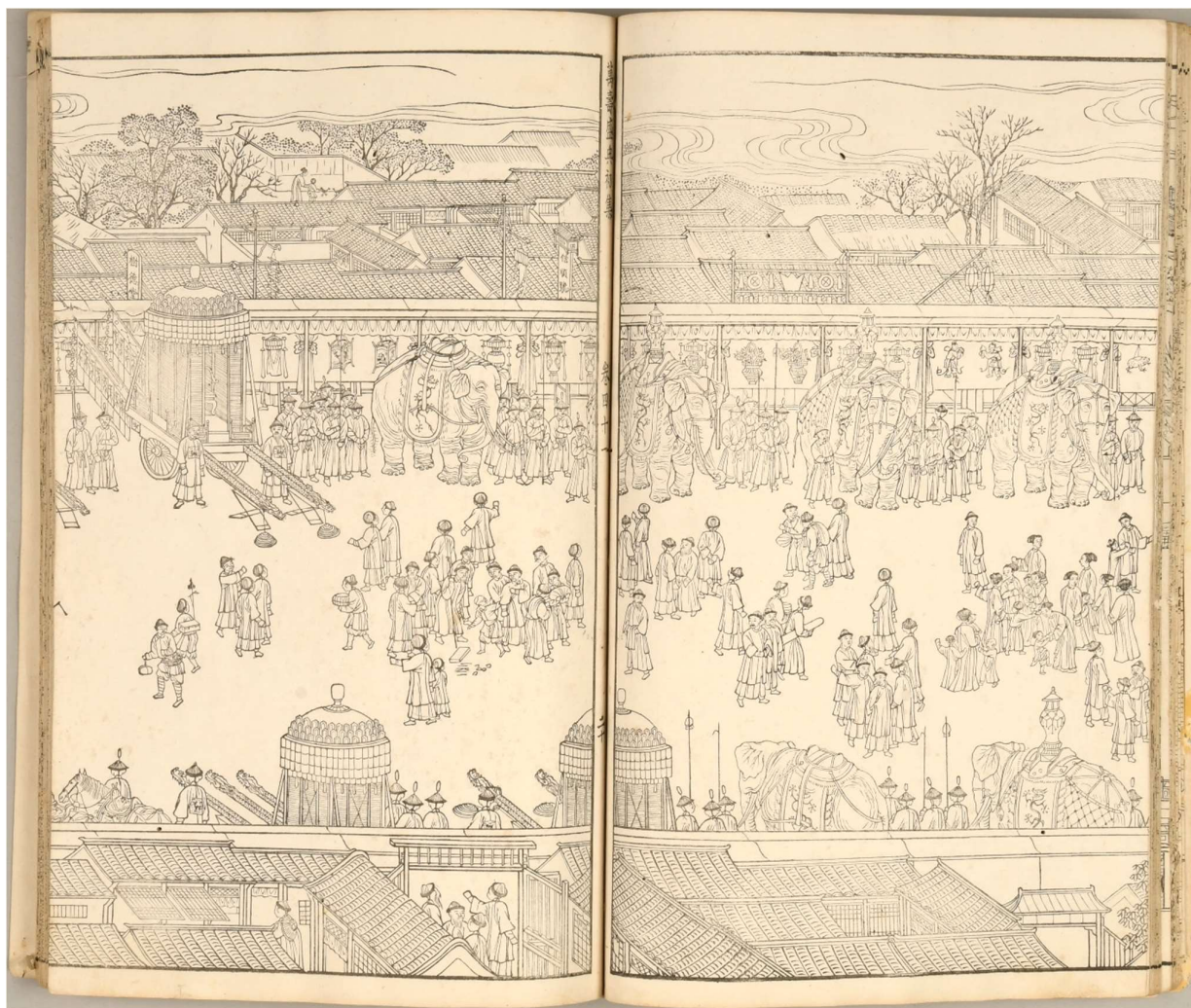
これら3点全ての保有を確認できる文庫は、国内では世界有数の文庫として知られる將軍家蔵書を引継いだ国立公文書館内閣文庫や清末の大蔵書家陸心源の蔵書を引継ぐ岩崎家の静嘉堂文庫のみです。

康熙帝の皇帝在位期間が歴代最長となった際に出版物された書籍

まんじゅせいてん ぶえいでんぼん
万寿盛典 (武英殿本)

康熙五十六年(1717)刊
の巻41

「万寿盛典」120巻は、康熙五二年に康熙帝の60歳の誕生日に開催された祝典の様子を伝えた書籍です。特に41と42巻を構成する146枚の「万寿盛典図」は、1枚1枚を宮廷画家や名工が丹念に制作し、清前期版画を代表する作品とされます。 【展示 163】



最大の青銅器コレクション図録

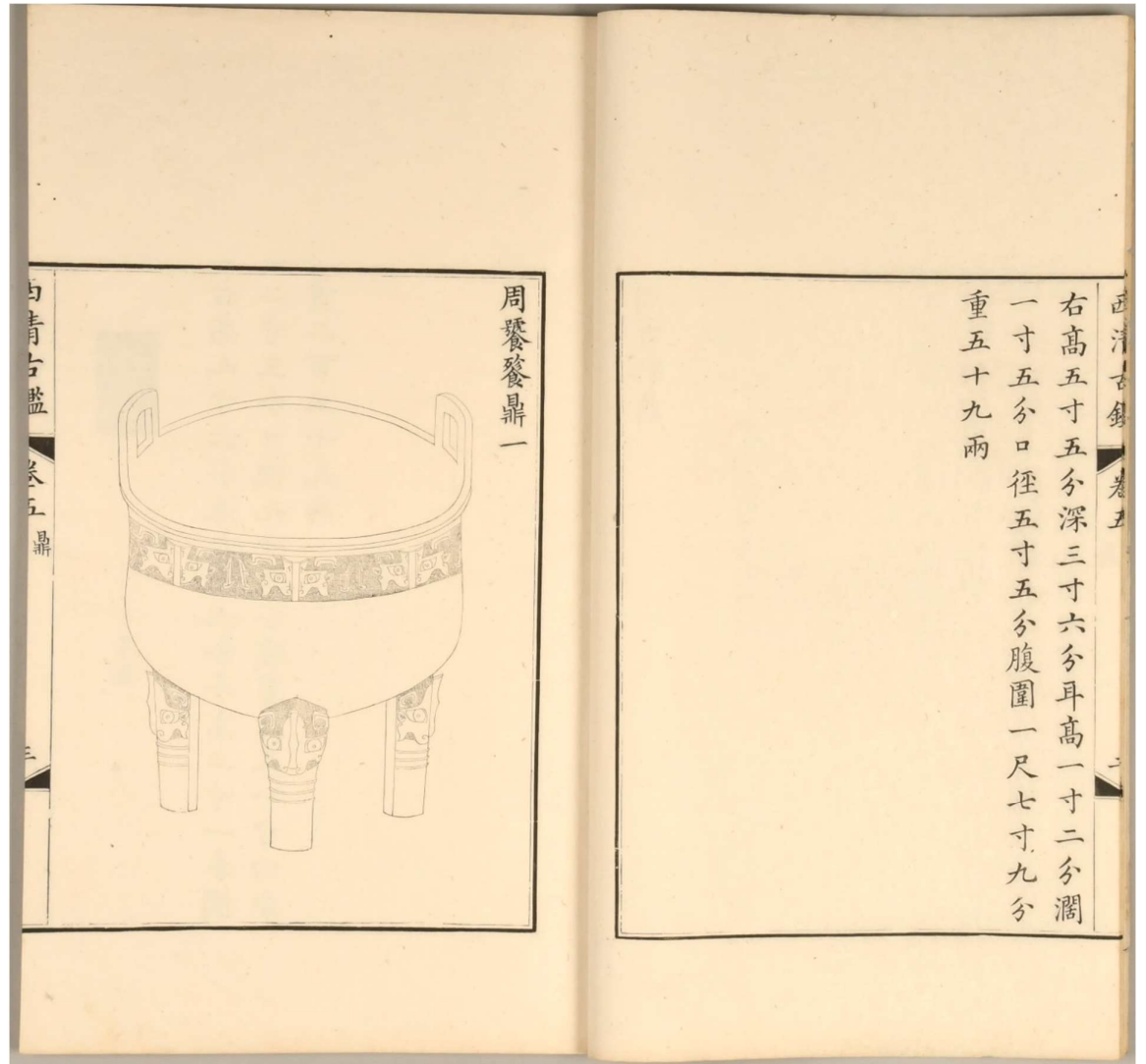
せいしん こ がん お えいでんぼん

西清古鑑(武英殿本) 40冊

乾隆一四年(1749)刊

のうち巻5

清王朝の宮廷印刷所で発行された乾隆帝所蔵の青銅器の図録です。
乾隆帝は青銅器等の古今有数のコレクターとして知られますが、コレクションの多くが現在散逸している。同書は1,529件の古代銅器が収録され、さながら、乾隆帝の青銅器博物館の図録のような書籍となっています。 【展示 164】



歴代最大級の巡幸録

なんじゅんせいてん
『南巡盛典』 卷95 盧溝橋

乾隆三六年(1771年)刊

『南巡盛典』は全部で120
卷。乾隆帝が実施した4度の江
南巡幸を描いた書籍です。

特に巻94～105までの
名勝は河北盧溝橋から浙江紹
興蘭亭までの行程を著名な画
家が模写した挿絵160幅が
挿入され、清代の江南の政治、
経済、文化を研究する上で重要
な書籍とされます。



現在では、康熙帝から乾隆帝に至る約 130 年間は中国が最も栄えていた時期（盛世）の一つで文化水準も最高峰であったことが認知されています。しかし、江戸時代の知識人にとっては、必ずしもそうではありませんでした。まず、中国を支配した清は満州人が建てた異民族王朝であったため、中華の国とは認知されませんでした。中国を指して支那と呼ばれるようになったのもこの時期です。

加えて、幕府は鎖国体制を採ったため同時代の中国の文物が直接民間には出回りにくくなり、漢学者の中にも過去の中国の学問は尊重するけれど、同時代の清の学問には学ぶことはないとする風潮もありました。梧陵は梧陵文庫に残された武英殿本の名品の数々に象徴されるように「唐本」を通して直接清の文物を入手することができたため、同時代の中国の文化水準の高さを偏見なく実感し評価することができたのではないかと思います。

しかし、清国の繁栄は、19 世紀以後の西欧諸国の進出によってかげりを見せます。次章以降それに就いても触れていきます。

第2節 濱口梧陵の地理研究

濱口梧陵は周囲に「世界の大勢を知らんと欲せば先づ其の地理を知らざる可からず。地理を知らずんば政治を語る能はず、地理を知らずして政治を行はんとする者は灯^{あかり}なくして闇夜^ごを行くが如し。」と述べていたとされるように地理学を極めて重視し、その道においては専門家といつていいほどの学識を有していました。梧陵と交流があった松山棟庵も「梧陵の地理学研究に対する熱心は真に驚く可^べきものあり。特に精通したるは支那の地理にして、近代知らざる歴代の地名さへ暗じ居りたり。」と証言しています。黒船来航以後、梧陵の興味は中国領域からアジア全体に拡大していったと考えられます。

こうした記述がある一方、実際、どのような書物をどの程度の水準で研究したかは不明でしたが、「濱口梧陵文庫」の調査によりその一端が判明しました。

それを示す資料が『地球説略』と『海国図志』です。

『地球説略』については『濱口梧陵伝』に掲載された福田兵四郎が梧陵に宛てた手紙には以下のとおり贈呈したことが記されています。

(現代語訳)蔵板『地球略説』 1冊、『六合叢誌』 3集ができました。『地球』の方は蕃書調所の取調が終わっていないため、人には見せないようにしてください。追って取調が済みましたら再度贈呈いたします。

この手紙が出された時期は1860年前後と考えられますが、福田兵四郎は万屋兵四郎とも称され、海外からの輸入書籍の検閲等を行う幕府の機関「^{ばんしょしらべしょ}蕃書調所」の御用商人で、日本初の海外新聞『官板バタビヤ新聞』の発行や勝海舟とともに開成所版『万国公法』を刊行したことでも知られ、梧陵とは親しい友人でした。手紙にある『地球略説(正しくは説略)』は「濱口梧陵文庫」に現存しています。

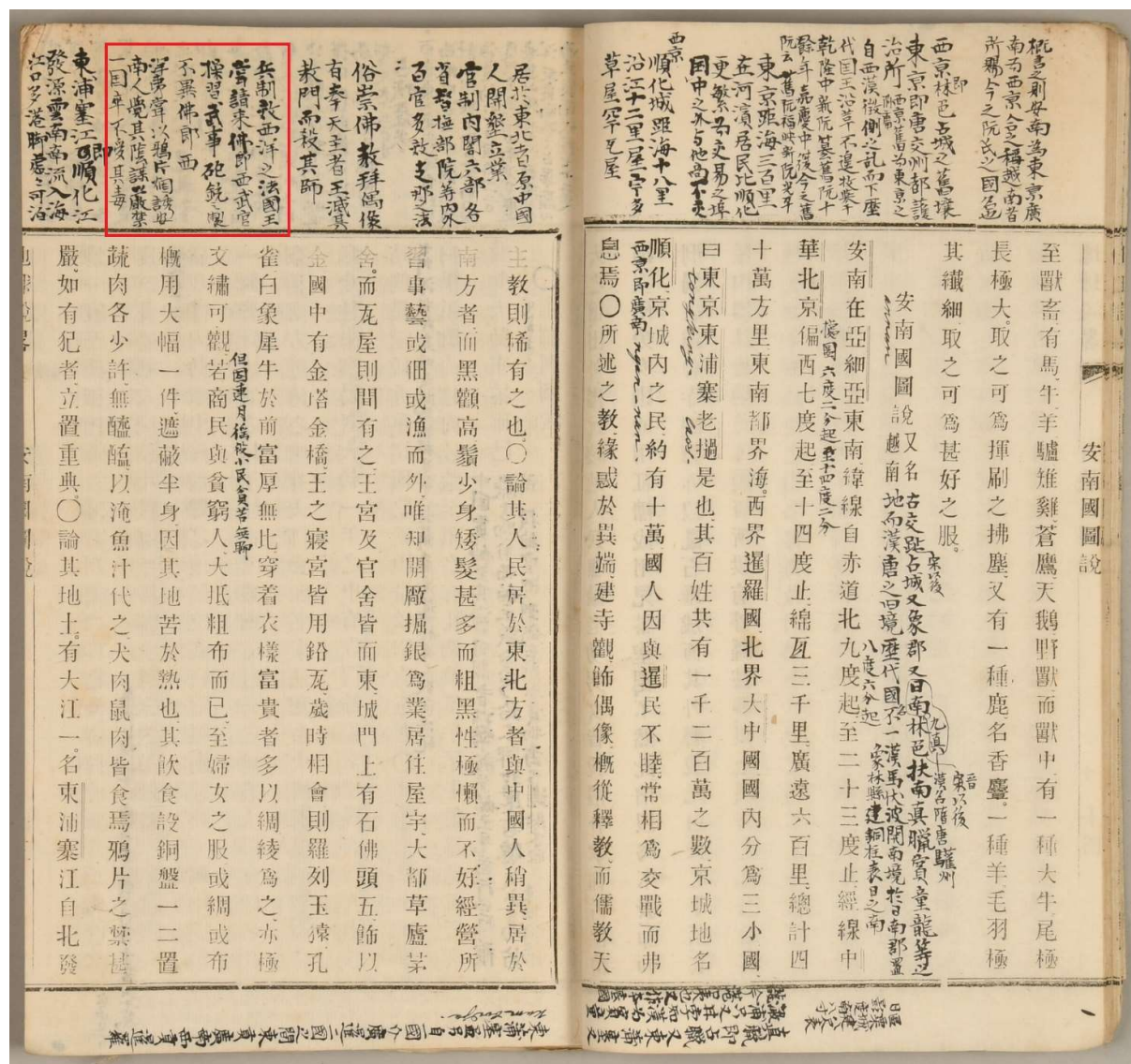
『地球説略』

1856年刊

アメリカの宣教師ウェイ(禧理哲)

が中国寧波で刊行した世界地理書です。万延元年(1860)には訓点を加えた日本版を万屋兵四郎が刊行します。日本版はキリスト教に関わる部分が削除されており、「濱口梧陵文庫」本はその省略がなく蕃書改め前の原書と考えられます。この書籍の東南アジア部分には数頁にわたって大量の書き込みがなされています。

『海国図志』の字体と近く梧陵の書込みと推定できます。【展示 155】

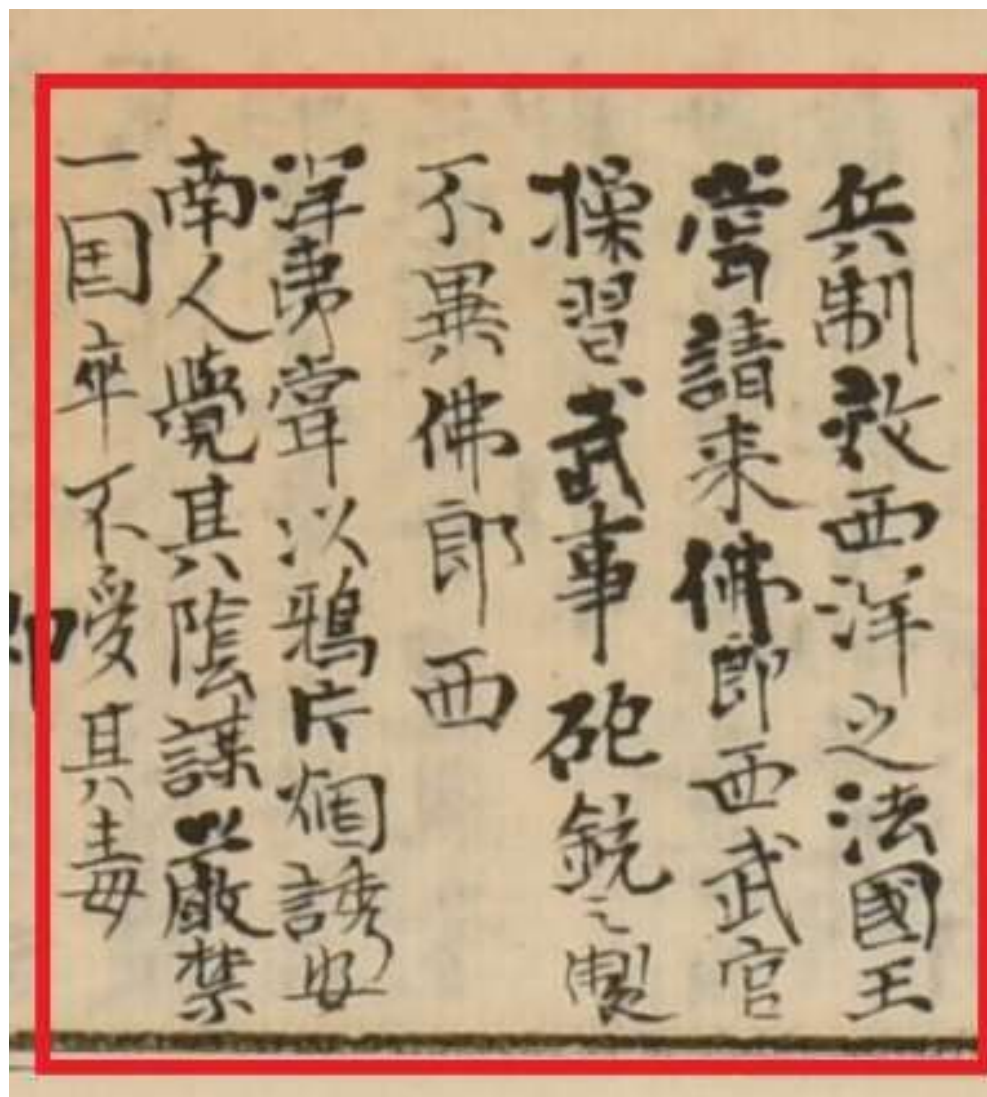


『地球説略』の梧陵の筆と推定される
ベトナム地域関連の書込み

兵制は西洋の法に教り国王嘗て^{フランス}仏郎西
の武官に来るを請い武事を操習し砲術
の製は仏郎西と異ならず。 洋夷^{かつ}嘗て
^{あへん}鴉片の^{けむり}烟を以て誘うも安南人其の陰謀
を覚え厳禁し、一國^{つい}卒に其の毒を受け
ず。

西洋の野蛮人はかつてアヘンの煙によ
って安南（ベトナム）人を誘惑したが安
南人はその陰謀に気付いて厳しく禁じ、
安南はアヘンの毒に汚染されなかった。

※フランスのヴェトナム進出とアヘン
問題への言及が注目されます。



続いて『海国図志』を紹介します。

『海国図志』はアヘン戦争直後の道光二十二(1842)年にアヘン問題に対処した清の大臣林則徐^{りんそくじょ}の依頼により彼の幕僚魏源が編纂した世界地理書です。世界地理を説きながら、西洋の長技の学ぶべきことを主張した警世の書として幕末の日本に最も影響を与えた書の一つに数えられます。二十種類以上の日本版が出版される一方、それぞれ部分訳であったため原書は高騰し入手困難な貴重書となりました。梧陵の蔵書には日本初渡来時と同じ第2版(1847年版)の60巻本が伝来しています。

梧陵の蔵書内の『海国図志』には中央アジアや南アジアの部分に2,168字にのぼる書き込みが見られ、「成則(梧陵の諱)按」の書き込みもあることから梧陵が同地域に関心を持っていたことが判明するとともに一連の書き込みが梧陵自身によりなされたことが推定できます。

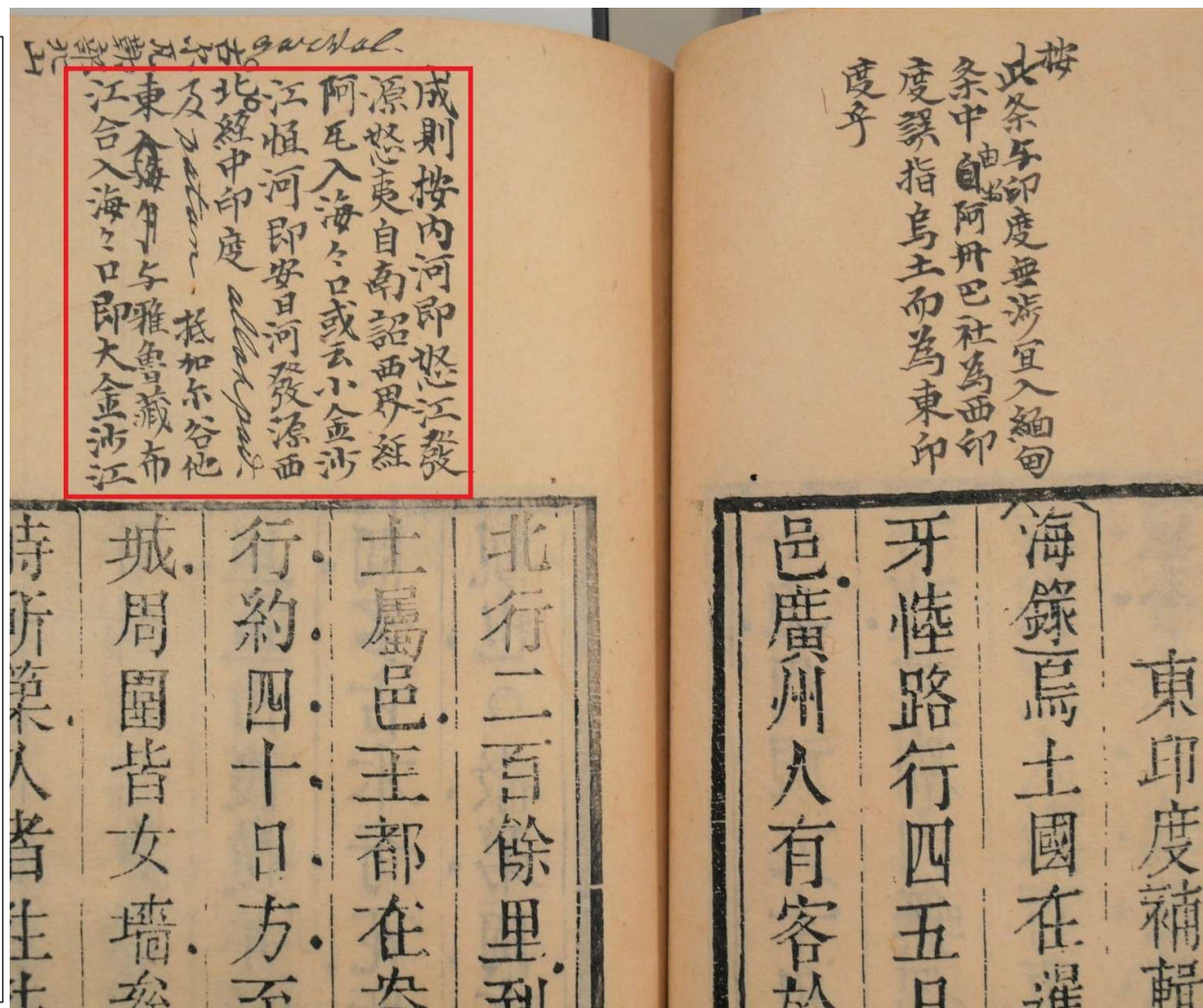
『海国図志』 卷 1 3 東印度 書込み 梧陵(本名成則)の署名含む

『海国図志』 卷 1 3 東印度

梧陵の署名(成則)入り地理考証

成則按ずるに (考えますには)

内河は即ち怒江、源を怒夷(雲南省の少数民族)に発し、南詔(雲南省)の西界自り阿瓦(ミャンマー北部)を経て海に入る。海口は或は云う小金沙江と。恒河は即ち安日河、源を西北に発し、中印度 allahpat 及び patan を経て加爾谷他に抵る。東のかた雅魯蔵布江と合し海に入る。海口は即ち大金沙江。【展示 156】

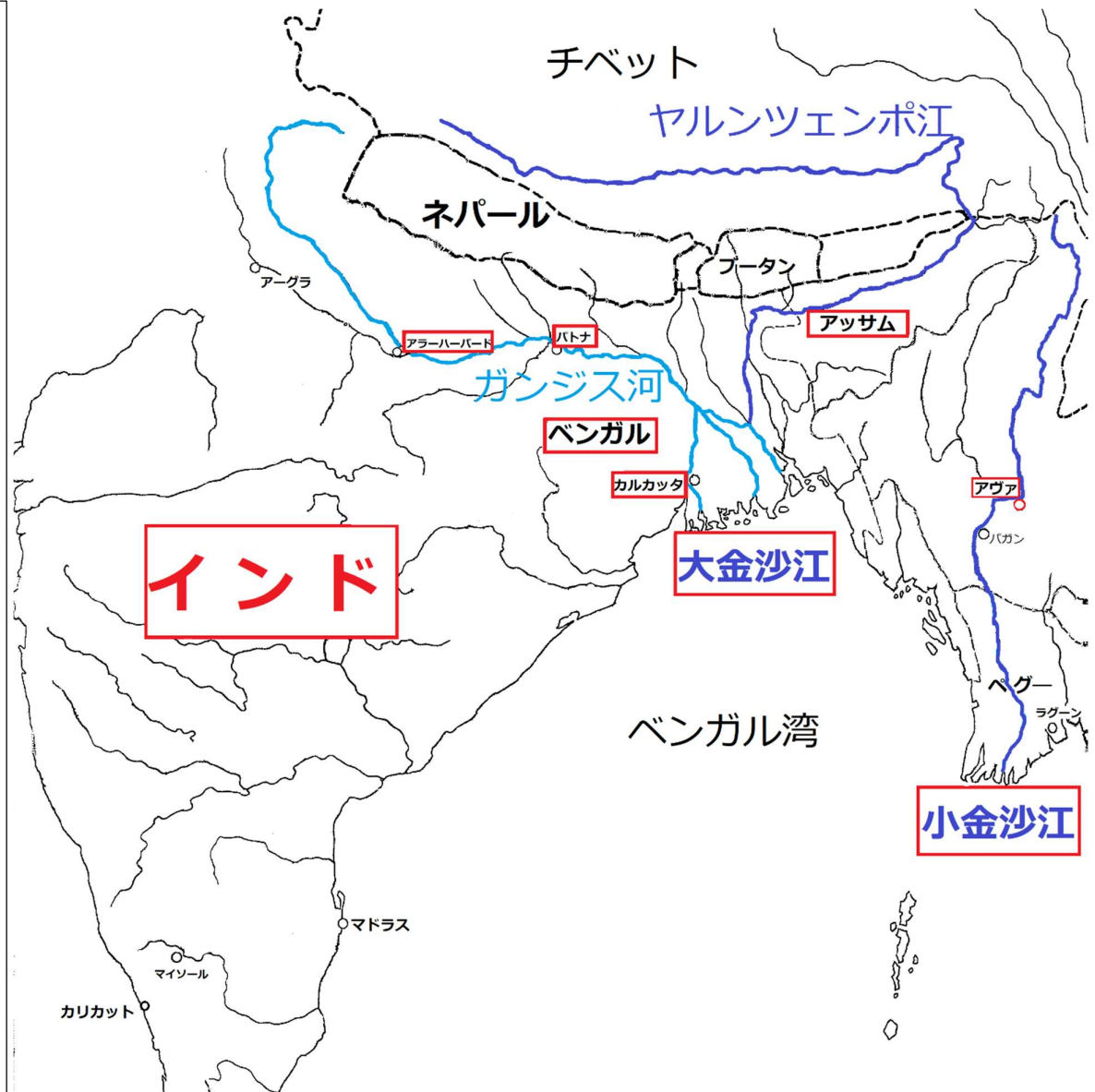


『海国図志』巻13 東印度 梧陵の署名
(成則)入り地理考証

成則按ずるに内河は即ち怒江、源を怒夷^{なんしやう}
(雲南省の少数民族)に発し、南詔(雲南省)
の西界自り阿瓦^{アヴァ}(ミャンマー北部)を経て
海に入る。海口は或は云う小金沙江と。恒
河^{ガンジス}は即ち安日河、源を西北に発し、中印度
アラハバード^{アラーハーバード}及びパトナ^{パトナー}を経て加爾各他^{カルカッタ}に抵
る。東のかた雅魯蔵布江^{ヤルンツァンポ}と合し海に入る。

海口は即ち大金沙江。【展示 156】

成則が考えるには内河は怒江の事で、源
流を怒という野蛮な人々の居留地に発し、
雲南の西境よりアヴァを経て海に入る。海
口をあるいは小金沙江と呼ぶという。恒河
はガンジス河のことで、源流を西北に発し
て、中インドのアラーハーバード及びパトナを經由
して加カルタに到達し、東方のヤルンツェンポ江と合
流して海に入る。海口はあるいは大金沙江
と呼ぶという。

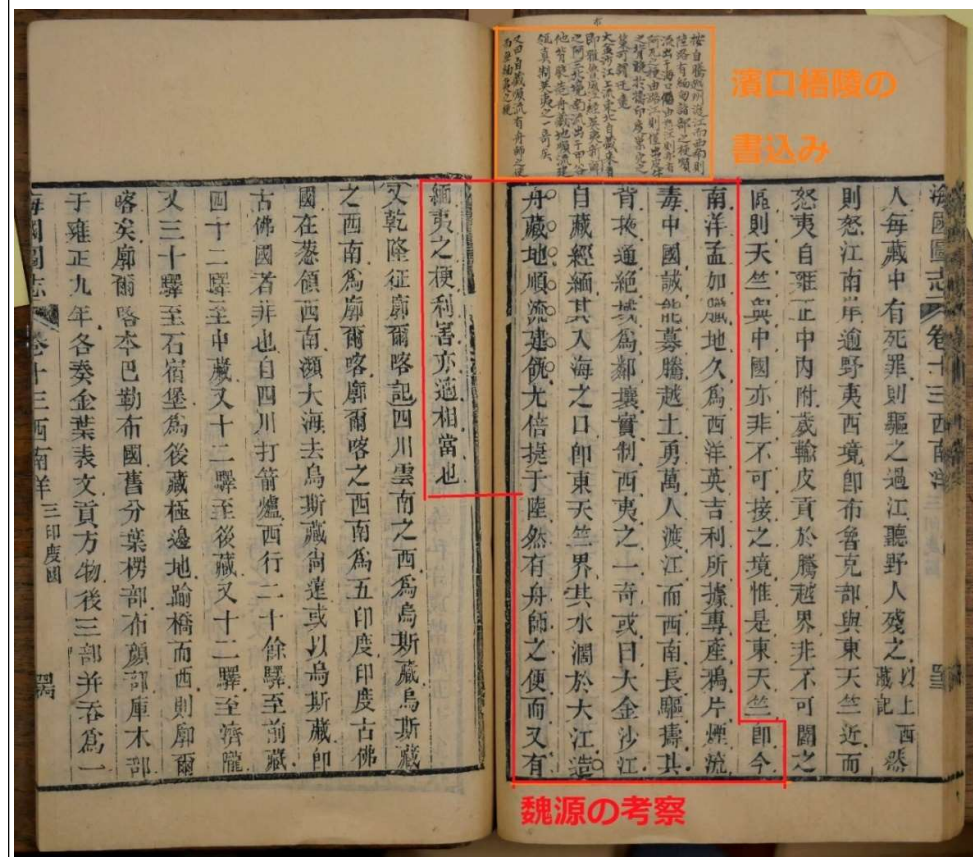


なぜこうした地理考証を行ったのか ～『海国図志』に見る魏源と梧陵のインド強襲計画～

『海国図志』巻13 海国図志の著者魏源の考察

すなわ 即ち今南洋孟加拉(ベンガル)の地、久しく西洋の英吉利の
 拠る所と為り、専ら鴉片を産し、煙は毒を中国に流す。誠に
 能く騰越の土勇万人を募り、江を渡りて南西し、長駆してそ
 の背後を擣かば、絶域を通じて、鄰壤と為る。実に西夷の一
 奇を制す。或は曰く、大金沙江は、蔵より緬を経て、其
 の海に入る口なり。即ち東天竺の界なり。其の水は大江より
 濶く、舟を蔵の地に造り、流れに順い瓚を建てなば、尤も陸
 に倍捷す。然れども舟師の便有りて、又た緬夷の便有り、
 利害亦た適すること相当なり。

今南洋ベンガルの地は、久しく西洋のイギリスの拠点とな
 り、専らアヘンを生産し、その煙の毒は中国を汚染している。
 誠に騰越(雲南省)の義勇兵を万人規模で募集することがで
 き、河を渡って南西に進軍し、長征してその背後をつけば、
 遠く離れた地を隣国にでき、実に西洋の野蛮人の不意を制す
 ことができる。あるいは大金沙江はチベットよりビルマを
 経て、其の海に入る河口という。つまり東天竺の境を流れる
 川である。その川幅は大江(長江?)より広く、舟をチベット
 の地で造り、流れに順って勢いよく攻めれば、陸路より倍早
 い。けれども水軍にも利があるが、途中ビルマの野蛮人に阻
 まれるのではないか。一長一短といったところではないか。

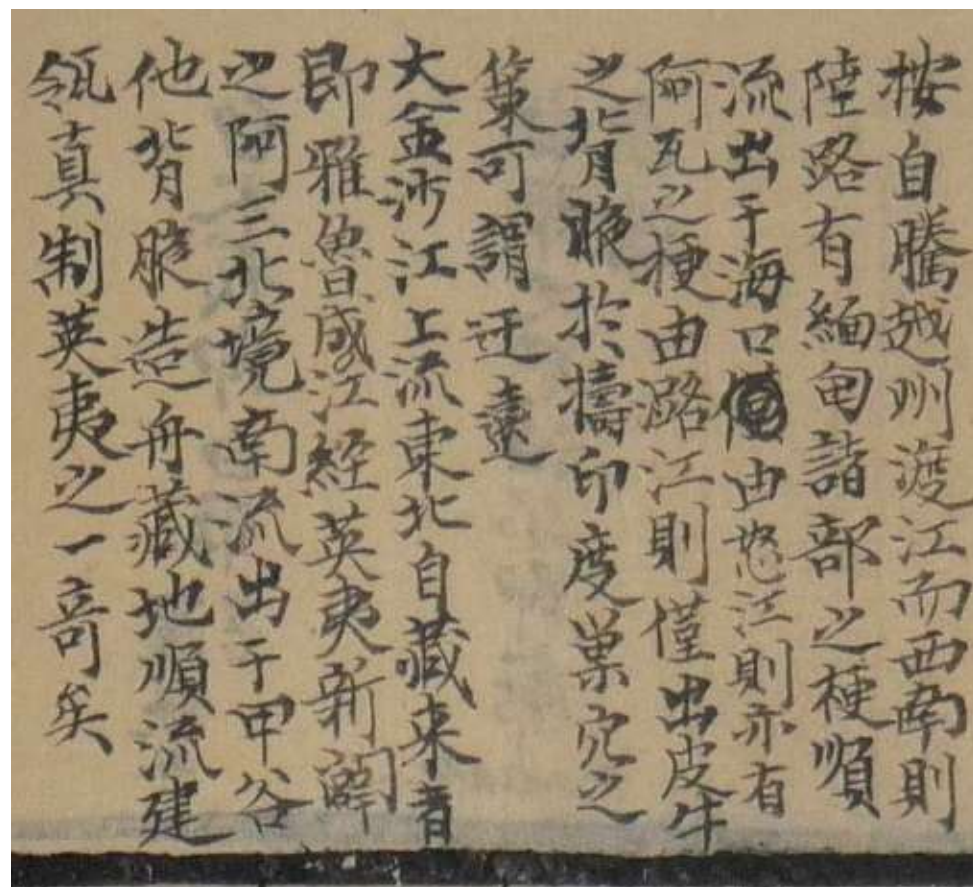


魏源の考察に対する梧陵の書込み

按ずるに騰越州自り江を渡りて南西すらば、則ち陸路に緬甸諸部の梗有り。流れに順い海口に出でんと怒江に由らば則ち阿瓦の梗有り。潞江に由らば則ち僅かに皮牛(ペグー[ビルマ南部]か)に出でも印度の巢穴を搗くの策に於ては迂遠なりと謂うべし。

大金沙江上流は東北の蔵自り来る者にして即ち雅魯成江、英夷の新闢の阿三北境を経て、南流して甲谷他の背掖に出づ。舟を蔵の地に造り、流れに順い瓚を建てなば、真に英夷の一奇を制するなり。

成則が考えるには騰越州より河をわたり南西に進軍すれば、陸路でもビルマ諸部族に阻まれるだろう。大河の流れに順って海口に出ようとしても怒江を経由すればビルマの中心地アヴァを通り抵抗を受ける。潞江を経由すれば南ビルマに出ることはできるがインドのイギリスの巢穴をつく作戦としては見当外れである。大金沙江の上流は東北のチベットより流れる川でヤルツェンポ江のことである。イギリスの野蛮人が新たに開拓したアッサムの北の境を経由して、南流するためカルカッタの背後に出ることができる。舟をチベットの地で製造し、河流に順って勢いよく進軍すれば、本当にイギリスの不意を制することができる。



魏源が最上とする陸路強襲案(①案)

清領騰越州を発しビルマ領内を約千km 進撃し、イギリスの拠点ベンガル地方(中心地はカルカッタ)を攻略。

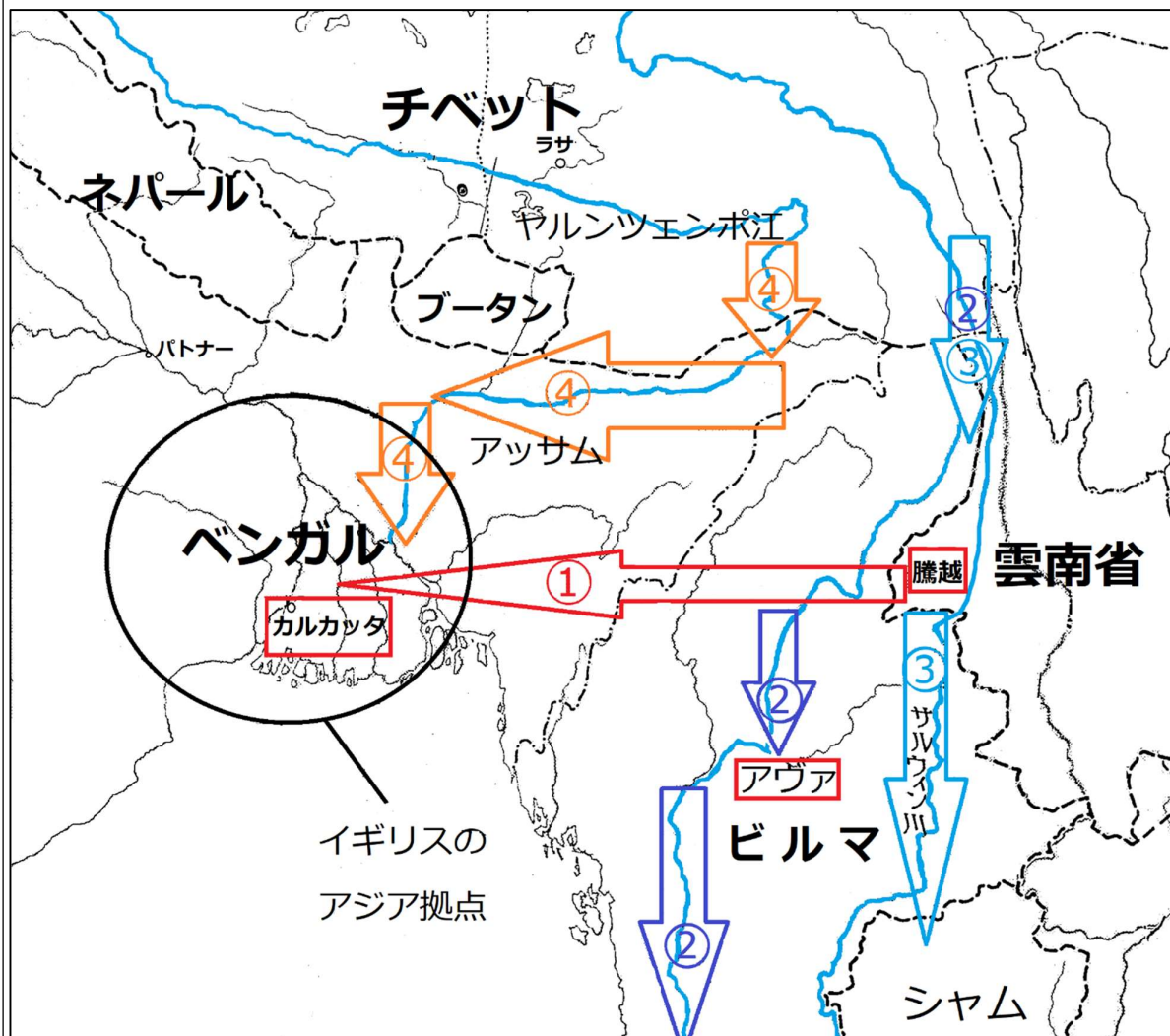
魏源の水路強襲案(②③案)

清領チベットを発し、②案(イラワディ河利用)の場合、ビルマの中心地アヴァを通る必要がある。③案(サルウィン河利用)の場合はベンガル地方から遠い。

梧陵の水路強襲案(④案)

チベットを発し、ヤルンツェンポ江を下り、背後からカルカッタを攻略。

このルートを確認するための地理考証か



⇒ 梧陵案の良否については、19世紀当時ヒマラヤ山脈の奥地にあるチベットは西洋人にとっては未知の土地でした。そこからの強襲の予測は難しく、効果的な奇襲になった可能性も有ると思います。

この考証がなされた背景に幕末期のアジアは、まずインド地域は、1858年にイギリスによってムガル王朝が滅ぼされ、その支配下に入ります。中国もイギリスがインドで精製し密輸するアヘンの蔓延^{まんえん}や二度のアヘン戦争の敗北により国力が衰退した時期でした。西洋勢力に対してアジア諸国は守勢に立たされることを余儀なくされることになります。

当時の東洋の知識人の中にはいかにその状況を挽回するか、考えた人物は少なくなかったと思われます。それを前提に梧陵の記名入りの書込み等を見直すと、中国辺境地域からインドに流れる大河の源流とその地域を重視した考察やアヘン問題への言及が多いことは改めて注目されます。

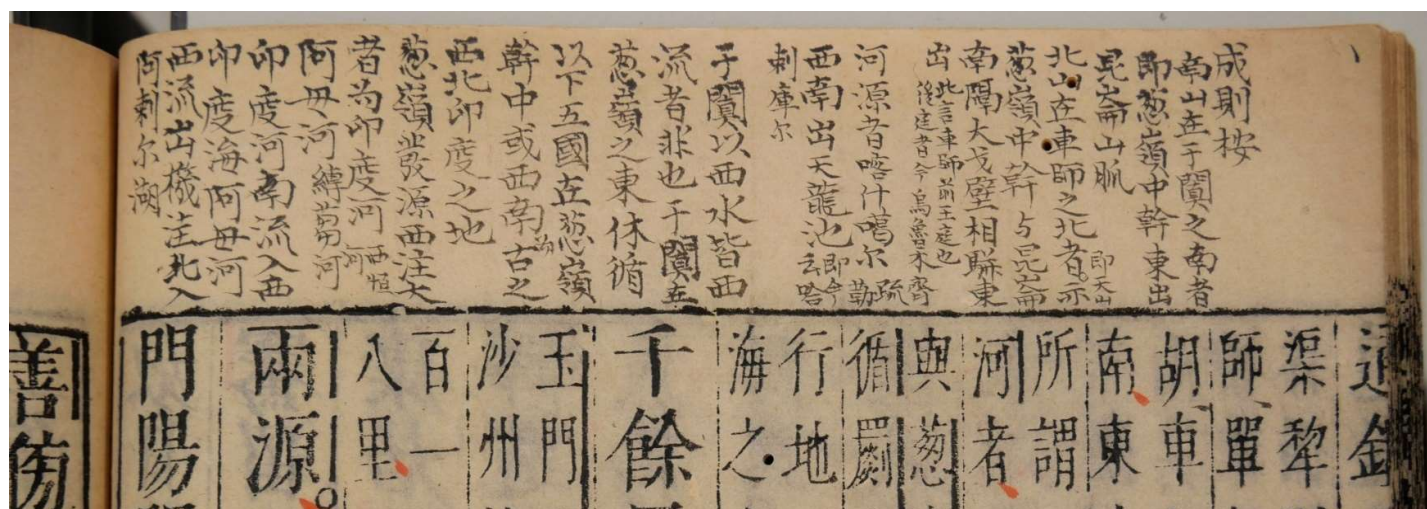
梧陵はインド等の西洋諸国の支配下の地域を研究し、その地を東洋人の手に取り戻す方策を考えるため地理考証を行っていたのかもしれませんが。そうした書き込みは次節で紹介する歴史書にも現存します。

第3節 「濱口梧陵文庫」と歴史書

梧陵は学習館知事時代に制定した学則に「歴史を読み、治乱の跡を弁じ、制度の沿革を察し、損益可知の政理に達すべし。(歴史書を読み、治乱興亡の跡をわきまえ、制度の沿革を察し、行動によって引き起こされる損益を知るといふ政治の真理に達する。)」と記しているように史書を読み、世の興廃や制度の沿革などを学習することを重視しました。

梧陵文庫には中国の歴史書の4つの文体(紀伝体・編年体・紀事本末体・政書)の書籍がバランス良くしかも通史的に収集されています。各文体の書籍が網羅されているのは梧陵と同時代の大家蔵書などでも珍しく、梧陵が中国の歴史に造詣が深かったことがうかがえます。

そして、それらの蔵書は収集されただけではなく読み込まれていたことは、各書に付された句読点や、編年体の歴史書『資治通鑑』には梧陵の本名成則の記名のある書き込みが有ることなどから確認できます。そしてその書き込みを『海国図志』の書き込み内容を踏まえ、分析すると梧陵のインド侵攻案はインダス河とヤルンツェンポ河の二つの大河を用いた同時侵攻案であった可能性が浮上します。



『資治通鑑』 卷20 漢武帝紀 西域地域に関する梧陵の考証。

【展示 157】

成則按ずるに南山は于闐^{ホータン}の南に在る者、即ち葱嶺^{パミール}〔高原〕の中幹の東のかた昆崙山脈^{コンロン}に出づ。北山は車師〔古代西域のオアシス国家〕の北に在る者。即ち天山〔山脈〕なり。亦た葱嶺^{パミール}の中幹は昆崙と南のかた大 戈 壁^{タクラマカン}〔砂漠〕を隔てて相い駢^{なら}び東に出づ 此れ車師の前の王庭を言うなり 後庭は今の烏魯木齊^{ウルムチ} 河源は喀什噶爾^{カシュガル}〔疏勒〕の西南、天龍池より出づ 即ち今の哈刺庫爾^{カラコルム}を云う 于闐^{ホータン}以西、水皆西流するとは非なり。于闐は葱嶺の東に在り、休循〔古代西域の遊牧国家〕以下五国は葱嶺幹中に在り、或いは西南は古の西北印度の地なり。葱嶺より源を発し西に注ぐ大なる者とは印度河^{パミール}〔西恒河〕・阿母河^{インダス}〔縛 葛 河〕なり、印度河、南流して西印度海に入る。阿母河、西流して筏注を出で、北のかた阿剌爾湖^{アラール}に入る。 ⇐大河の源流地域に着目した地理考証。

成則が考えるに（中略）河の源がカシュガル〔疏勒〕の西南、天龍池（今のカラコルム）より出でる ホータン以西の河が皆西に流れるとしているのは誤りである。（中略）パミール高原より水源を発し西に注ぐ大きな河とはインダス河とアム河である。インダス河は南に流れ西インド海に入る。アム河は西に流れ筏注を出て、北方のアラル海に入る。⇐大河の源流地域に着目した地理考証。

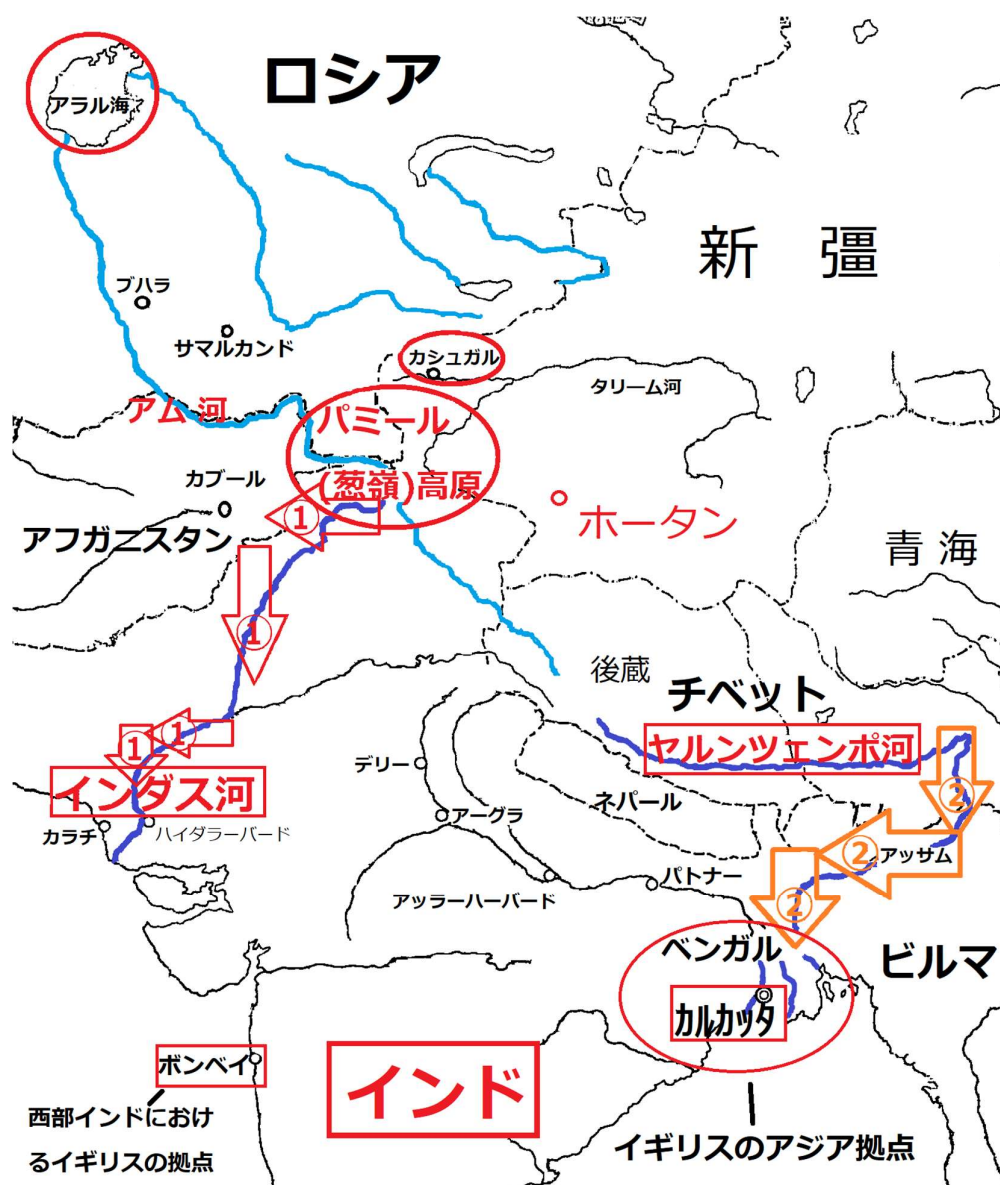
インド同時侵攻案が実施された場合のイメージ

第一軍

西域のカシュガル付近に駐屯する部隊を同地域からインド方向に流れるインダス川を利用して南下させ、西部インドを攻略し、西部インドからベンガル地方へ支援ができない状況とする。

第二軍

中国西南地域に駐屯する部隊をチベットに集結させ、ヤルンツェンポ河を利用して南下し、イギリスのインド根拠地のベンガル地域を背後から急襲する。



当時中央アジア地域の地理はまだ本格的に調査されておらず、まともな地図も流通していなかったことを鑑みるとこういった地理情報が頭にあったこと自体もかなりすごいことではないかなと思います。

濱口梧陵の地理研究は、その多くが淡々とした地理考証に終始するためその中から彼の思想性を読み取ることは容易ではありません。しかし、そうした中にも今回紹介した書き込みからはアジア地理研究を行った背景には西洋諸国のアジア進出への警戒感があったことは垣間見ることができると思います。

実際、イギリスの清国に麻薬アヘンを密輸し、国力を弱体化させたうえで、清王朝が本格的に摘発に乗りだしたら、それを理由に戦争し、密輸を合法化させたそのやり方は、控えめに言っても文明国の所業とは言えないと思います。前節で推定したように仮に梧陵自身が同時代の清の文化にあこがれを抱いていたのなら、なおさら許しがたい蛮行にうつるでしょう。実際、書込みで梧陵はイギリスを呼ぶ際、英国の英に夷の字(野蛮人)を付け加えています。梧陵自身は、幕末期に開国論を展開したことは一般に知られていますが、それはあくまでも西洋諸国が紳士的に振る舞うことが前提であることは留意する必要はあるかなと思います。次章で紹介する様に梧陵は防衛のための軍事の役割を相当重視しています。

第4章 和本の世界

第1節 海防関係書籍と兵書

濱口梧陵は嘉永四年(1851)に海外の脅威から広村を守るため崇義団を組織し、安政元年(1855)にロシア船ディアナ号が大阪湾に侵入した直後の安政二年には浦組を組織し、村民を教練するなど海防に注意を払い続けた人物でもありました。

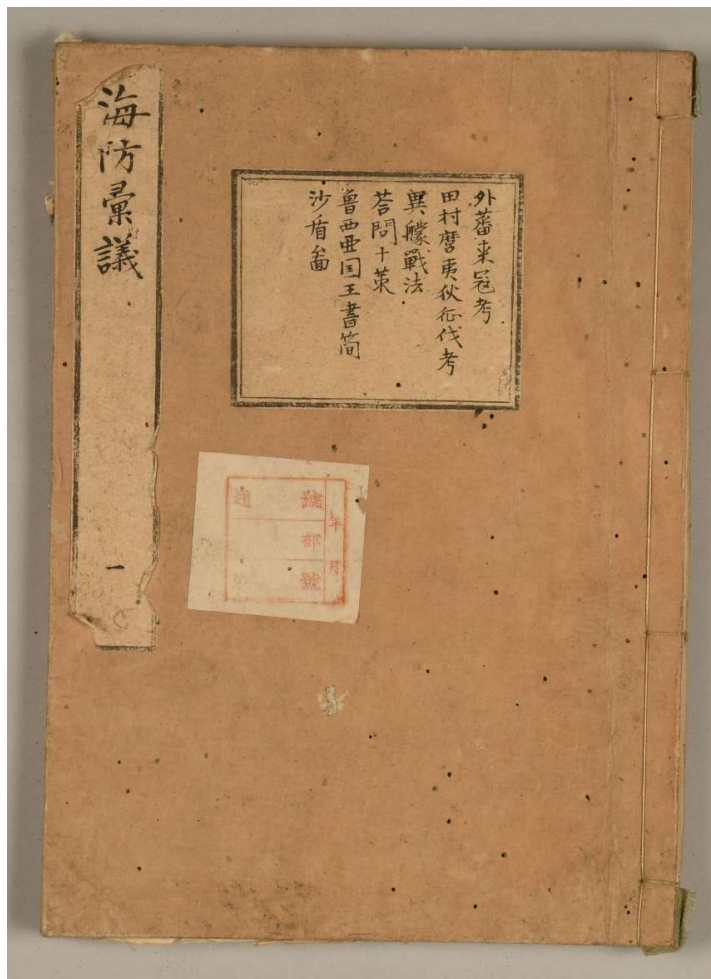
菊池海荘はそれに先立つ嘉永三年海防建議を上奏し、同年には有田郡・日高郡文武総裁に任命されています。梧陵の行動もそれに呼応したものであったと考えられます。

さらに『濱口梧陵伝』には同志である梧陵のために『海防彙議』という書を送付したことを伝える海荘からの以下の手紙が収録されています。

(現代語訳)『海防彙議』十巻は友人の松園(紹介する塩田順庵の号)が編集したものです。昨年から頼んでおいたものが出来てまいりましたので、ご覧下さい。補遺も五巻ほどできるようでございます。

『海防彙議』 1巻と収納箱

『海防彙議』は菊池海荘の友人の塩田順庵が海防関係の著作を集め編集した叢書です。1850年頃に菊池海荘の勧めで作成されました。梧陵文庫の中にも続編を含め65冊が現存します。梧陵の海防の知識の源泉として重要な書籍と考えられます。 【展示 153】



明治初め和歌山藩は封建制から郡県制への変革を意図した大規模な藩政改革を実施します。特にその一環として兵制改革が実施され、明治三年(1870)に公布された「兵賦略則」は政府が明治六年に制定した「徴兵令」のモデルケースとして、歴史的にも重要な意義を持つと言われます。

梧陵はそれに先立つ明治元年(1868)に藩主に対して「農兵制」を上言した。『濱口梧陵伝』によると梧陵の農兵制は「全國皆兵制論にして、現在に於ける徴兵制の基礎とも云ふべし。」とされ、その全文が収録されています。梧陵は明治元年12月に勘定奉行に抜擢されて以後、学習館知事に任命され、学制改革を実施するなど、藩政改革の首脳の1人でした。兵制改革にも影響を与えた可能性があります。

「濱口梧陵文庫」には167冊にのぼるその当時の兵書が残されており、幕府系機関の蔵書の一部を引き継いだ静岡県立図書館葵文庫(146冊)や仙台伊達家の蔵書を引き継いだ宮城県立図書館伊達文庫(158冊)等の幕末明治期の比較的大規模な兵書コレクションをも上回る規模です。

なかには「和歌山藩秘書寮蔵書之記」や「学習館記」と押印されたものも含み、これらは兵制改革期の軍事教練の教科書として使用された可能性のある重要な資料です。



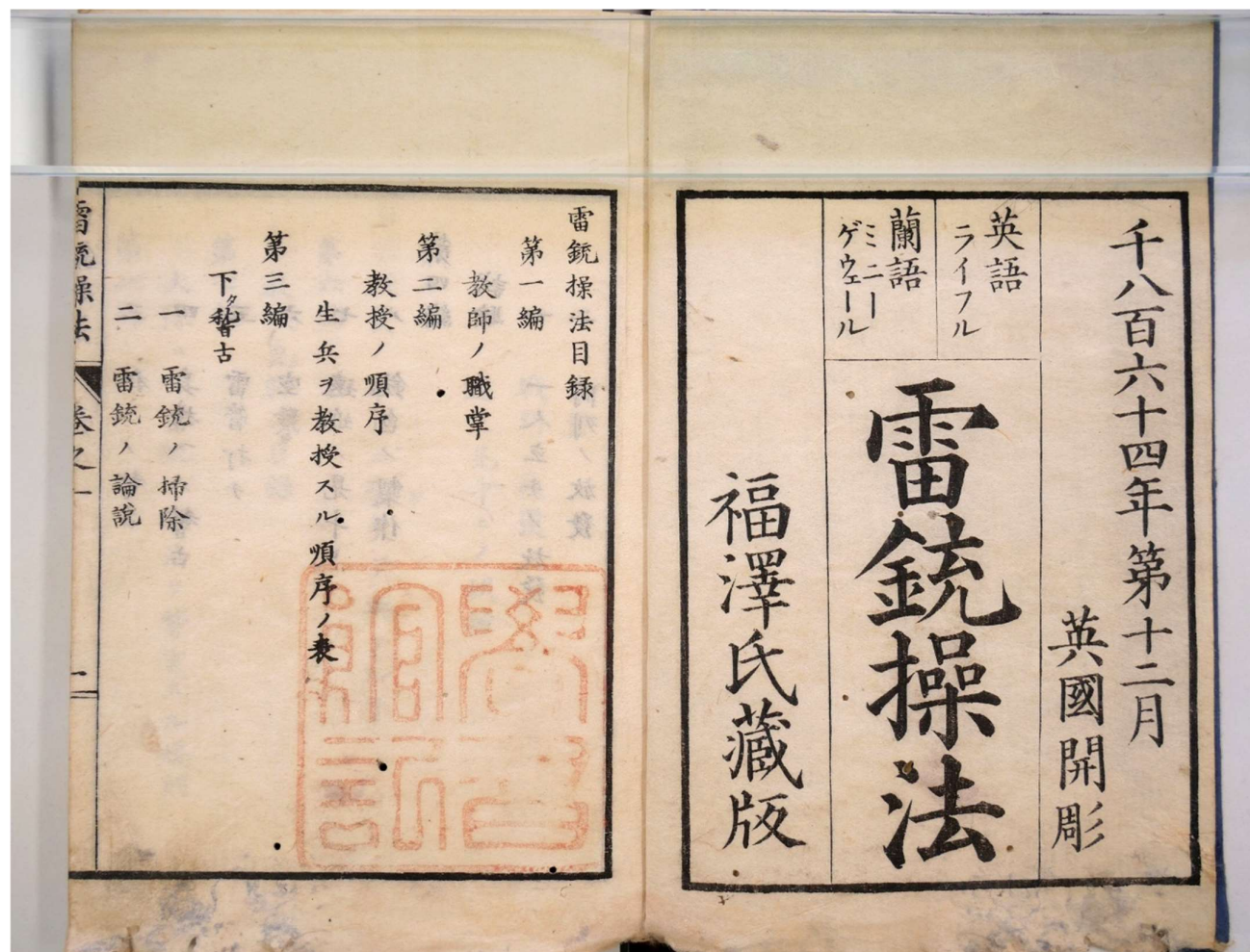
兵書收納箱



らいじゅうそうほう
『雷銃操法』

1冊

慶応二年(1866)刊
ライフル(三ニエール)銃に関するイギリスの解説書を福沢諭吉が翻訳した書。3冊刊行された内の1冊が梧陵文庫に現存します。和歌山藩藩校学習館の蔵書印が押印されています。濱口梧陵は明治二年学習館知事に就任し、藩校に洋学寮を敷設するなど多くの改革を行っています。【展示 161】

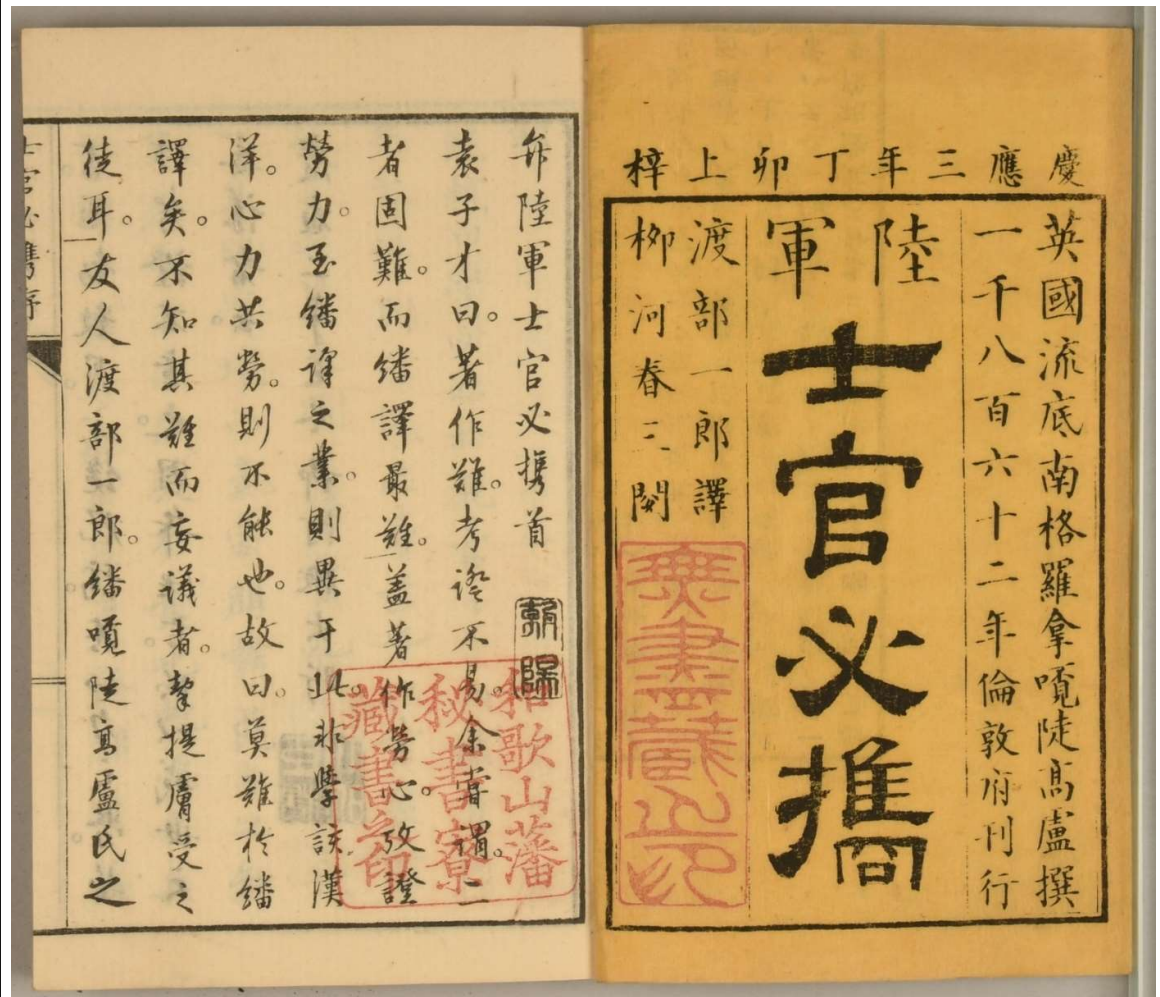


慶応三年(1867)刊

幕府が開設した開成所で英語教員であつた渡部一郎が翻訳したイギリスの戦術書。

「和歌山藩秘書寮」の蔵書印が押印されています。秘書寮は、濱口梧陵が学習館知事を務めた時期に、創設した部署です。梧陵は教育改革の一環で、学習館に士族以外の者も入学することを認め、学習館の成績優秀者は秘書寮に入り、藩の官吏に登用する道も開きました。【展示 162】

このように濱口梧陵は、西洋の長所としての技術や制度を導入することに関してはかなり積極的であつたと思われます。こうした姿勢は梧陵の師であつた佐久間象山や『海国図志』の作者魏源が提唱したことでもあり、そうした精神を受け継ぎつつ、西洋を一方的に毛嫌いするのではなく優れた部分は優れた点として学んで時代に対応しようとしていたことがうかがえます。



第2節 「濱口梧陵文庫」内の海保青陵著作

藩政改革に関連して「濱口梧陵文庫」所蔵の和本中、特にその存在が注目されるのは海保青陵(1755～1817)の著作が多数現存していることです。海保青陵はいち早く近代の富国策に近い政策を提唱したことで今日知られていますが、彼が評価されるようになったのは梧陵死後の明治後半とされるからです。「濱口梧陵文庫」所蔵の海保青陵の著作は『善中談』、『天王談』、『萬家談』、『變理談』、『前識談』、『富貴談』の六書(六談)で、青陵が一般に知られる前では最大級のコレクションです。



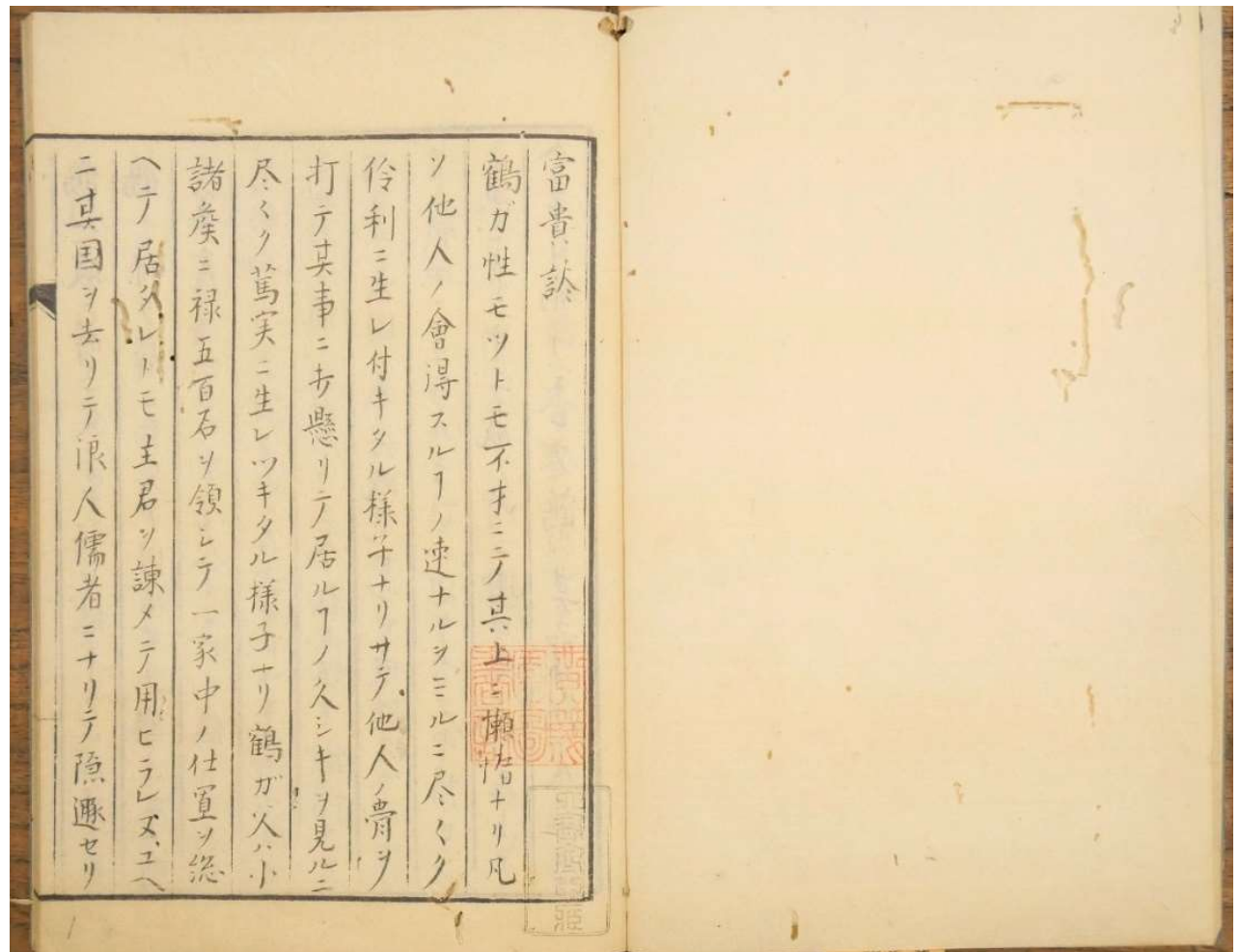
「濱口梧陵文庫」内の海保青陵の著作の中で特に重要なものが『富貴談』です。

ふうきだん
『富貴談』

1冊

19世紀

『富貴談』は1921年に紀州ゆかりの経済学者上田貞次郎の手によって「濱口梧陵文庫」内から初めて紹介され、内容が世に知られるようになりまし
た。梧陵は一般に知られていない人物の著作も含め貪欲に政治に役立つ情報を収集していたことがうかがえます。【展示 159】



以上、濱口梧陵文庫の主要なものを紹介させていただきましたが、この文庫は普通の庄屋などの地方の指導者層の蔵書とは隔絶した存在であるということは実感できるのではないかと思います。その収集範囲や政治色の強さから個人的な感想としては、将軍家蔵書を含む幕府系機関の書籍収集活動を一個人が精一杯やろうとしたらこういう内容の蔵書となったという印象すら受けています。近世の商人の家の蔵書としても異質だと思います。なぜ、これほど大規模で政治色の強い蔵書が形成されたのか、次章でその理由について考察していきます。

第5章 「濱口梧陵文庫」が形成された理由について

第1節 なぜ蔵書形成できたのか

まず梧陵が蔵書を形成できた理由としてヤマサ醤油当主としての財力があることは疑いようがないですが、人脈形成も大きな要因でした。先に触れた橋本柑園や菊池海莊等も重要ですが、広村近隣の栖原は江戸の出版物の3割を発行した江戸最大の書店須原屋の出身地で、当時の当主は梧陵と親戚関係にあったことも軽視できません。

さらに先に触れた国外の書籍の検閲等を行っていた蕃書調所の御用商人福田兵四郎や大阪屈指の書店秋田屋の暖簾分け店当主秋田屋太右衛門は梧陵の親友でした。梧陵は書籍流通に影響力を持つ彼らの人脈に持っていました。

それに加え、梧陵は福沢諭吉等の全国レベルの文化人とも書籍のやり取りがあったことが彼の日記などからわかります。これらの人脈が重なり合い梧陵は民間では国内有数の書籍ネットワークを有する人物であったと考えられます。このことは梧陵の蔵書形成を考察する上での前提条件です。

せかいくにづくし
『世界国尽』

6冊

明治二年(1869)刊

福沢諭吉が世界各国の歴史地理を初学者が暗唱して覚えられるように作った地理書。『濱口梧陵伝』所収の梧陵の日記には明治三年一月に同書が福沢より送付されたことが記されており、その記述を裏付ける書籍として重要です。当時福沢と梧陵はともに洋式学校設立に携わる等、緊密な関係にありました。【展示 160】



第2節 なぜ蔵書形成したのか

濱口梧陵は、幕末期には外国からの脅威に対応するために崇義団や浦組を組織する等、率先して郷土防衛にあたり、明治維新以後は和歌山藩政改革に指導者の一人として従事し、廃藩置県後は手腕が買われ、短期間ですが明治政府の駅逡正(頭)にも抜擢されました。江戸期に生を受けた梧陵からすれば、それらの状況はいずれも前代未聞の事態でそれに対応することを否応なしに求められました。

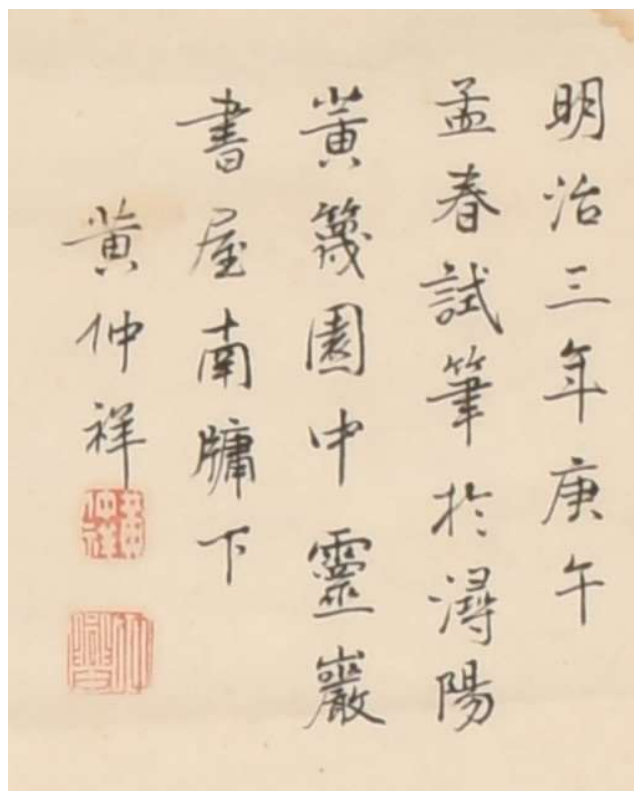
梧陵は、学問を学ぶ意義を「抑 ^{そもそ}も今の世に^{あた}方りて為すべきの事業枚挙に^{いとま}違 ^{わた}あらず。多々益々多岐に^{いわ}渉りて、
^{すこぶ}頗る望洋(果てしないという)の思を免れざるなり。選んで之に居らんとす。何を以て急とし、要とせん。曰く、学術経験以て知識を開き、物理(物事の道筋)を明らかにするのみ。之を^す捨てて他に^よ拠るべきの道あるを知らざるなり。(そもそも、今の世になすべき事業はとてつもなく多い。多いうえに益々多岐に^{わたり}、とても果てしないという思いを抱かざるを得ない。取捨選択するにも、何が急を要し、何が重要なのだろうか。その答えは、学術経験によって知識を開き物事の道筋を明らかにすることのみにある。この道を捨てて他に依拠する道があるとは知らない)」であると述べていますが、それはこのような状況に対応する形で自身の学問を形成してきた彼の真情を吐露したものと考えられます。これを踏まえると個人蔵書としての梧陵文庫は当時梧陵自身が置かれていた状況に対応するために収集された政治上の参考資料群の性質を有するものと考えます。

その書籍群が収蔵される書屋の存在に最初に言及したものが梧陵の友人黄仲祥筆の「山水画」です。

黄仲祥筆「山水画」

明治三年(1870)筆

梧陵の友人黄仲祥が書いた山水画の題には、「広の黄箴園(西濱口家)内の霊巖なる書屋の南窓の下で書初めした。」という記述があり、広川には奇石の存在が著名な霊巖寺があるため、それになぞらえて珍しい書籍が集積される書屋として梧陵文庫に言及したのかもしれませんが。管見の限り梧陵文庫に言及した最初の記述です。なお、霊巖の出典を調べるとこの話は更に続きがあり、中国の雲崗石窟が所在する山を霊巖山と呼ぶようです。雲崗石窟は世界遺産に認定される5万休もの仏像が彫り込まれた中国最大級の石窟寺院です。仮にそれに例えられたとすれば、書屋が霊巖山だとして、書籍は何に例えられたのか、想像が膨らみます。【展示 128】



結びにかえて

濱口梧陵は慶応二年(1866)に学校「耐久社」を設立します。耐久社は「規則」に「朝野雅俗を問はず貧富貴賤を論ぜず且居常(普段)読書ノ閑暇なき者と雖ども篤志いとまの人は皆入社を得べし(仕官しているか否か、学芸のある無しを問わず、財力の有る無し、身分の貴賤を論ぜず、かつ普段読書の時間がない者でも志のあるものは皆入社できる)」とあり、あらゆる階層の人に開かれた学問所をめざして創設され、梧陵は耐久学舎のために梧陵文庫を設けたとされます。梧陵の蔵書は学生に公開されることになったのです。

「梧陵文庫」を利用し恩恵を受けた人物に日本の近代地理学の創始者の一人で、アジア地理学の第一人者であった小川琢治おがわたくじ(1870～1941)がいます。小川は幼少期に父の浅井篤が耐久社の教師であったため、梧陵文庫に出入りできました。小川の子、貝塚茂樹は以下のように証言しています。

これは父がいつも言っておりましたけれども、濱口梧陵の持っていた漢籍を勝手に読むことができて非常に幸せであったと。(『東方学回想』5頁)

梧陵文庫は彼に最初の本格的に漢籍に触れる機会を提供しました。

また濱口梧陵と友人であった福沢諭吉は漢学等の旧来の学問に手厳しい立場を取り、特に漢学者については酷評した人物でした。例えば、梧陵とともに洋学校設立に携わった松山棟庵への手紙では人を導くを知らず。^{ほと}殆んど仙人の境界に安んじ、さてその書は何物と尋ねるに、数万巻の書にあらず。^{たず}僅かに数十巻の書を数百度も繰返し、^{えるところ}所得は唯スレーブ(その書籍の奴隷)の一義のみ。^{わす}

しかし、同じように教養の基盤を漢学に置いていたものの濱口梧陵への福沢諭吉の評価は異なったものでした。それは下記の明治十七年梧陵渡米の際に米国の息子福沢一太郎へ送った手紙を見ると鮮明です。

此人は少年の時より文に志し、洋書こそ読まざれども博識の士なり。面会の節は随分礼を尽して応^{いたさるべくそうろう}接可被致候。諭吉又記。

このように梧陵は欧文が読めなくても福沢に博識の士として礼を尽くすべき対象とされるほど教養の深い人物として認知されていました。

そのことから濱口梧陵は稲むらの火の主人公としてや明治期の和歌山の主要な政治家として知られていますが、同時に幕末明治初期の和歌山有数の知識人でもあったことがわかります。

そして「濱口梧陵文庫」は福沢諭吉にすら敬意を払われる濱口梧陵の学問・知識の広さを実感できる幕末明治初期の民間人蔵書の巨峰とでもいうべき内容を持つ蔵書です。

また、梧陵が洋学の師として入門した佐久間象山も「東洋道德、西洋芸術」と述べたとされるように東洋的な教養・精神を土台としつつ、更に西洋的な学芸・技術を導入し時代に対応することを重視した人物でした。「唐本」や翻訳兵書などの東西の書籍を集積した「濱口梧陵文庫」の蔵書内容にもその傾向がよく表れていると思います。

このように梧陵が時代に対応し活躍できた背景には、多様な書籍から知識人としての教養と海外情報を取得し、時代に対応しようとする姿勢があったことがうかがえます。「濱口梧陵文庫」はそれを現代に伝え、また、紀中地域の文化水準の高さを現在に伝えるものとしても重要な書籍群と言えるものではないかと思います。

※赤字の文章は当日資料にはなく、当日口頭で述べた部分と、講座後判明したことの追記です。